教職員のみ

※令和４年度以降入学生用

学校番号	２０１

令和８年度　地理歴史科

教科	地理歴史	科目	(学)世界史研究	単位数	２単位	年次	３年次
使用教科書	「世界史探究　新世界史」（山川出版社）						
副教材等	「最新世界史図説タペストリー二十三訂版」（帝国書院） 「新世界史要点ノート応用編 2025」（啓隆社）						

１　担当者からのメッセージ（学習方法等）

・どんな歴史的事象にも、その背景には色々な人々の営みがあります。とくに近世、近代には、現代に通じる歴史的概念が多く出現します。教科書数行の出来事の裏に、なぜそのような事象が起こったのか、そしてそこにかかわる人々の選択や葛藤があることに思いを馳せながら、理解を深めてください。
・勉強法の前提としてですが、入念な予習と、授業にしっかり集中して臨むことがまず肝心です。授業の内容をその時間でしっかり理解すれば、復習に多くの時間を割く必要はありません。その為にも、予習する時間を大事にしましょう。そのうえで、わからない部分があれば、授業中であっても担当者に質問してください。
・日々の予習では、教科書を読み込んで全体の流れを押さえましょう。語句を確認し、問いを持ちながら授業に臨めるよう、予習してください。授業ではこの問いを解決できるよう取り組みましょう。
・日々の復習では、どのような意図や狙いの授業・取り組みに参加していたか、自分はどんなことを考えていたかを思い出すようにしましょう。語句や説明を再暗記することに時間をかける傾向がありますが、自分の学び方を振り返り、改善していく時間にしましょう。

２　学習の到達目標

(1) 世界の歴史への興味・関心を高め、歴史総合、世界史探究で続けてきた地理的条件や日本の歴史の知識とも関連付けながら理解していきます。
(2) 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ判断力を身につけていきます。
また、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きるための歴史的思考力を培います。
(3) 歴史に関する資料を適切に調べてまとめ、資料に基づいて考察した結果を適切に表現したり、議論したりする力を身につけます。
(4)文化の多様性と現代世界の特質を多角的かつ広い視野から考察し、現代社会が直面する諸課題について、歴史的観点から考察し、主体的な追究を通して認識を深めます。

教職員のみ

※令和４年度以降入学生用

３　評価の観点及びその趣旨

観点	a:知識・技能	b:思考・判断・表現	c:主体的に学習に取り組む態度
観点の趣旨	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、特に近世・近代史に着目して、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解している。 ・諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を、特に近世・近代史に着目して、適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けている。	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、特に近世・近代史に着目して、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察している。 ・歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを特に近世・近代史に着目して、効果的に説明し、それらを基に議論したりする力を培う。	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、特に近世・近代史に着目して、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする。 ・多面的・多角的な考察や深い理解を通して日本または他国の歴史・文化を尊重することの大切さについての自覚などを深めている。
評価方法	・定期考査 ・小テスト ・要点ノートおよび板書ノート、プリント	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
上に示す観点に基づいて、学習のまとまりごとに評価し、学年末に５段階の評定にまとめます。学習内容に応じて、それぞれの観点を適切に配分し、評価します。			

※令和４年度以降入学生用

４　学習の活動

学期	単元名	学習内容	単元(題材)の評価規準	評価方法		
				知(a)	思(b)	主(c)
一学期	第１０章　アジア諸地域の再編	「オスマン朝」「サファヴィー朝とムガル朝」「清朝支配の拡大」「清朝の近隣諸地域」 オスマン朝支配下には多様なエスニシティの民族がいたが、柔軟な統治体制と官僚制を整備することでこれに対応したこと、サファヴィー朝は、まずトルコ系遊牧民が中心となっていたが、17 世紀にシーア派を中心とする新しい体制へ変貌をとげたこと、ムガル朝は支配下に多くの非ムスリムを抱えていたこと、その対応に様々な工夫を凝らしたことなどを理解する。清朝の皇帝は支配下の各民族に対し多様な権威を示すことで統治を安定させたこと、清朝の領域は直轄領、藩部、朝貢国にわかれていたこと、朝貢貿易は重視せず、民間人による自由な取引を認めていたことを理解する。	a: オスマン朝は各地に異なった支配をおこなうことで安定をはかっていたこと、ムガル朝ではヒンドゥー教徒に対し融和策を講じたことを理解している。清代では新大陸の作物導入が人口増加、辺境の開発が進んだことなどを理解している。 b: 非ムスリムに対する信仰の寛容、サファヴィー朝によるイランのシーア派化を現在につなげて考察している。朝鮮の清朝に対する「小中華」の意識はなぜかを考察している。 c: イスラームの影響により新しいヒンドゥー教（シク教）が生まれた経緯の追究や、清朝が華夷一体を掲げ、柔軟な統治を実現したこと、人口増加は環境破壊をまねき、民衆の反乱がおこったことを現代へのつながりや歴史の理を追究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第11章　ヨーロッパの成長と世界の一体化	「ヨーロッパ人の海洋進出」「世界の一体化とその進展」「近世の始まり」「宗教改革」「主権国家体制の成立」「オランダの覇権から英・仏の抗争へ」「北・東ヨーロッパの動向」「近世ヨーロッパの思想と社会」 15 世紀からのヨーロッパ人の海洋進出の背景や要因について、とくに、ポルトガルとスペインがなぜその動きを先導したのかについて深く探究する。ヨーロッパ人のアジア各地への進出の実態について、アメリカ植民地化と比較しつつ把握する。ヨーロッパの経済が 16 世紀に成長、17 世紀に停滞、18 世紀に再成長という循環をなしていたことをおさえつつその要因、さらにそのなかで地域間分業が進展し、農場領主制が成立したなどのことにも着目する。ヨーロッパ史における 16〜18 世紀の独自性について、それ以前の中世や工業化以後の近代との比較のなかで概略的に理解する。主権国家体制の意味、この体制が現代の国際社会の基礎となっていることを意識し、主権国家の基本的形態について理解し、その典型としての絶対王政の特徴について専制君主制との相違を意識づける。16 世紀以降の自然科学の発達を科学革命としてとらえつつ、その影響を受けて合理主義や経験主義の思想が発達したことを理解する。	a: ポルトガルが設置した航路上の交易拠点について、ポルトガルにとってのその地域の役割も含めて理解している。ポルトガルやオランダなどのアジアへの進出が政治的支配をともなわなかったことについて理解している。カルヴァン派の予定説を取り上げ、これが商人や手工業者による富の獲得を正当化したことについて理解する。対抗宗教改革の内容について、15 世紀のカトリック教会の姿勢からの変化に着目しつつ理解している。 b: この時代が中世はもちろん、19 世紀以降の近代とはなぜ区別すべきなのかについて考察している。軍事革命の進展がどのように近代国家の形成、発達を促進したのかについて考察している。主権国家の発達の理由として、16 世紀以降のヨーロッパ諸国で君主権力がどのように伸張したのかについて考察している。 c: この時期の科学や技術が現代の生活にどのように結びついているのかについて探究しようとしている。現代国際社会の成立と発展の歴史について考える際に、後期ローマ帝国時代までさかのぼりうることを理解したうえで追究している。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

教職員のみ

※令和４年度以降入学生用

二学期	第12章　国民国家と近代民主主義社会の形成	「商業社会と産業革命」 「アメリカ革命」 「フランス革命とナポレオン」 「反動と改革」 「１８４８年の諸革命」 17-18 世紀の農業や手工業の発達と海外貿易の拡大が産業革命の前提となったこと、技術革新や新しい階級、都市化が起こったことを理解する。 アメリカ独立戦争と歴史的意義、合衆国成立過程の集権か分権かの対立を理解する。 フランス革命の背景と契機、立憲王政までの過程、そして共和政時代とナポレオン台頭の変遷を理解する。 ウィーン体制の理念形成と、ロマン主義の思潮やナショナリズム、ブルジョワジーの台頭といった時代観を理解する。 二月革命と諸国民の春によるウィーン体制崩壊を理解する。	a:農業革命、資本主義農業、資本の蓄積、綿織物や鉄の需要の増大が輸入代替生産を目指す動きになったことついてなど、理解し整理できる。アンシャンレジーム、革命、19 世紀の循環的不況を理解している。 b:18 世紀の交通の発達が経済を大きく変化させたことやイギリスの植民地政策の転換が起こした影響、革命や人権宣言の意義などを考察している。 c: フランス革命やナポレオンの諸政策が近代国民国家の諸要素を創出したことについて探究しようとしている。アメリカ建国の理念がどのように現代のアメリカの考え方に影響しているか、社会主義思想が生まれ本来どのような理想社会が模索されていたのかなど、広い視野に立って現代の背景を考えようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第13章　新国家の建設と世界市場の形成	「アメリカ合衆国の発展」 「ラテンアメリカとカナダ・オーストラリア・ニュージーランド」 「イギリスとフランスの繁栄」 「クリミア戦争とヨーロッパの再編」 19 世紀前半のアメリカ合衆国の民主主義の発達、半ばの南北戦争、後半の世界最大の工業国化について理解する。 ラテンアメリカ、カナダ、オセアニアの独立について整理し、事後の文化的特徴や経済社会の諸問題について理解する。 19 世紀にイギリスが資本主義をけん引したこと、後発資本主義国やアジアの従属地域の状況を理解する。 東方問題が意味するヨーロッパと東方諸国との関係、ドイツイタリアの統一の動きと国際関係を理解する。	a:アメリカ合衆国の二大政党制や人口や経済力の面での南北格差の状況が整理できる。後発資本主義国がどのようにイギリスに対抗したのか、東方問題とヨーロッパ列強の動きを理解し整理できる。代表的な科学者や芸術家の成果を挙げつつ時代性と結びつけることができる。 b:アメリカ合衆国のではヨーロッパと違いなぜ社会主義が拡大しなかったのか、ラテンアメリカでのクリオーリョの果たした役割、従属諸地域が資本主義諸国に富を奪われたことについて考察している。 カヴールやビスマルクなど国家統一に深くかかわった人物の活動について表現している。 c: 民主主義の典型とされるアメリカの政治制度の発達を探究しようとしている。南北戦争を起点に現代の合衆国が抱える諸問題、現代のラテンアメリカ諸国の諸問題の起源という視点、ドイツイタリアの統一と19 世紀のナショナリズムとの関係などから探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

教職員のみ

※令和４年度以降入学生用

	第14章　アジア諸地域の動揺	「西アジアの動揺」 「南アジア・東南アジアの動揺」 「東アジアの動揺」 オスマン朝下の独立運動に列強がどのようにかかわったのか、イギリス東インド会社の植民地支配の方法やインド大反乱、反乱後のイギリス政府によるインド統治について理解する。 清朝に対する、イギリス、ロシアの進出と、アヘン・アロー戦争や太平天国の乱と清朝の海禁政策や政治体制に与えた影響について理解する。 日本の開国と明治維新を世界史の中で理解する。	a:オスマン朝から自立を目指した民族や地域を地図で確認しワッハーブ運動やエジプトの近代化について理解している。イギリスによるインド支配への流れや、列強による東南アジア植民地化の内容を理解している。三角貿易や北京条約、アイグン条約を、地図を用いて確認できる b:オスマン朝下の諸民族の自立運動や近代化を比較しながら、またロシア・イギリスの利害とその影響を考察している。イギリス支配のインド社会や経済にどのような影響があったのかコラムやグラフなどの資料を活用して考察している。列強の進出が清朝の対外政策にどのように影響しているか、朝鮮の政変に日本がどのように関係を変化させていったのか考察している。 C 西アジアや東アジアへの「ウェスタンインパクト」への対応の違い、現代のインドが抱える社会問題や宗教間対立についてイギリスの植民地時代がどう影響しているかを探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

三学期	第15章　帝国主義と世界	「現代社会の特質」 「帝国主義と列強」 「アジアの民族運動」 第２次産業革命と独占資本の成長、労働運動の展開と、帝国主義国における社会主義運動の展開や国民の政治参加の拡大を理解する。列強の対立がどのように第一次世界大戦に至るのかを理解する。 オスマン朝での青年トルコによる立憲革命、パン＝トルコ主義がのちのトルコ共和国へつながったこと、イランでは西欧の資本による近代化とその利権をめぐり政府に反発する民族運動がおこったことなど、各地で列強に対抗する民族運動が活発になることを理解する。中国では列強による中国分割に清朝では変法で対処しようとしたが、旧体制派によって失敗に終わり、革命運動へと情勢が変化していったこと、日新日露戦争から日本の韓国併合へ至る状況を理解する。	a:トルコでは初の憲法を停止して反動化したことが青年トルコ人運動へ動かしたこと、イランではタバコ＝ボイコット運動など列強と癒着する政府に民衆が運動を起こしたこと、インドでもベンガル分割令を機に反英民族運動を展開したことを理解している。 b:第１次と第２次産業革命の違いについて、英独仏の社会主義政党とロシアのものとでは性格の違いはどこからくるのかについて、ヨーロッパ各国の国民の政治参加の拡大や政府の福祉政策の拡大について、考察している。 c:科学技術の発達と動力、万国博覧会で注目された技術による目覚ましい発展、社会主義者がどのように労働者への働きかけ運動規模を拡大したのかを探究しようとしている。手国主義についての様々な学説を調べ各国の対外進出を比較するなど探究している。アジア各地域のこの時代の民族運動、革命運動を指導した人物について具体的に調べ、運動の特徴について探究している。	・定期考査 ・小テスト ・要点ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度